

J・D・サリンジャーと禪

向井俊二

—

現在、アメリカの社会に、日本ブーム、あるいは禪ブームというものがあるが、多くのアメリカ人が日本の文化に異常な関心を払っていることは周知の通りであるが、文学の方面でも、禪ないし東洋の思想を、単なる異国趣味の域を越えた真剣さでとり入れようとする傾向がみられる。

これから論じようとするサリンジャー (J. D. Salinger) は、その代表的な一人として現在各方面から注目を浴びている作家である。この論文は、サリンジャーが自己の創造した人物の行動の原理として、あるいは追求する問題の解決のための手段として、どのように禪をとり入れていくかについて考察し、戦後のアメリカ知識人の問題意識の一端を紹介しようとするものである。

緻密に言うと、このテーマを論じるに当たっては、「禪とは何ぞや？」という問題につき検討し、相互の了解を

はかつておくべきなのであろうが、これは現在の私にとつては殆ど不可能に近い。サリンジャー自身がしばしば引用している禅の研究者R・H・ブライズ氏は私の師であり、かつて教室で英文学、というよりは禅の講義をみっちり聞かされたのであるが、それが私が禅について考えさせられたただ一つの機会であつて、勿論、それで禅がわかる筈はなかった。禅問答といえ、わけのわからぬ話の代名詞のようにもなっている。禅の何たるかを知るには、人間の一生を費してもまだ足りないことかも知れぬ。私がここで言えることは、禅は体系的な思想というよりは、実生活に非常に密着したある種の体験そのものであり、禅を理解するには、人間として、呼吸し、食い、眠り、悩み、愛し、すなわち生を實踐することが第一の条件であるということだ。

だが幸いにしてわれわれ日本人は、遺伝的に、環境的に、ある程度禅的な共通の物の考え方を持っている。風流とか、大悟徹底というような言葉を使う時、私達の間には平和とか民主主義というような言葉を使う時程の觀念上の齟齬を生じない。私の禅の理解は、恐らくこの日本人に共通した觀念の域を出るものではないだろう、ということをまず断っておく。

二

J・D・サリンジャーは一九一九年ニューヨーク市の生まれ。ユダヤ系の父、アイルランド系の母を両親に持つ中流家庭の出で、普通教育を終えた後ミリタリー・アカデミー(軍隊生活のシステムを取り入れた大学予備校)に進んだ。早くから演劇と創作に興味を持ち、この学校の校歌を作ったり、雑誌の編集をやったりする早熟な少年だった。卒業後は、ヨーロッパに渡ったり、また帰ってきて二三の大学の講座に出席したりした。二十一二歳

の頃から作品が商業雑誌に載るようになった。第二次大戦が始まると陸軍に志願し、一九四四年ノルマンジー上陸作戦に参加した。戦後、雑誌『ニュー Yorker』に作品を発表するようになり、一九四八年頃から世間から注目され始めた。

彼の作家としての地位を確立したのは、一九五一年に発表した *The Catcher in the Rye* (邦訳に橋本福夫氏の『危険な年齢』という訳名の一冊があるので以下の題名にはこの名前を用いる) である。それは同年代の『ケイン号の反乱』などのような華々しい人気を集めることはなかったが、主として学生を中心とするインテリから歓迎され、着実にベスト・セラーのリストにのり続けた。以後、約十年間の間に単行本にして三冊の作品が世に出たが、これは非常な寡作と言える。しかし、彼の人気はうなぎ昇りに上昇を続ける。一方、当人は極端に人との交際を避けるようになり、現在、ニューハンプシャー州のコーニッシュ郊外に、妻と二人の子供とごく親しい友人を除いては、殆ど世間と没交渉の生活を送っている。

『危険な年齢』の主人公ホルデン・コールフィールド (Holden Caulfield) がサリンジャーの第一期の中心人物であるとする、それらからあと現在までの作品の中心には、ガラス家 (The Glasses) という、血統に關してだけ言えばサリンジャー自身の家によく似た一家が登場する。サリンジャーがいつ頃から禪に興味を持つようになったかは定かでないが、近作のガラス家の物語には、禪話や禪語をもとにしたエピソードがふんだんに盛り込まれている。だが、そのような直接的な禪への言及がある以前から、例えば『危険な年齢』の頃から、主人公の禪的な世界への志向を示唆するような話が発見される。私はこの論文ではむしろ後者の場合を中心にとりあげ、主人公となる人達の魂の遍歴のあとをたどってみたいと思う。

だがまず、その中でも最も重要で、作者の禪に対する関心がなかったなら生まれなかったであろうと思われる

人物を紹介しておこう。それはグラス家の長男シーモア (Seymour) で、彼は小さい時から神童の聞えが高く、ラジオのクイズ番組 "It's a wise child" の名子役であり、十代で博士号をとり、二十代で大学教授となり、第二次大戦に出征し、神経衰弱となって軍の病院に入院し、以後奇矯な言動が多くなり、結婚後妻とフロリダへ出かけているうちに、ホテルでピストル自殺をとげる。三十一歳。彼は中国の詩や日本の俳句などを通じて東洋の思想に共鳴し、仏教や儒教を研究し、自ら俳句を作り、はては、自分が東洋の聖人かなにかの生まれ変わりとなっているのではないかと思わせるふしを見せるようになる。こうした設定にどれほど意味があるのか問題であるが、シーモア思想は下の兄弟達に大なり小なりの影響を与え、一連のグラス家物語の精神的ムードとなっている。

だがシーモア自身が登場するのは「バナナフィッシュにはあつらえむきの日」 ("A Perfect Day for Banana-fish") の一篇だけで、他は、主として彼の死後、そのすぐ下の弟であるバディ (Buddy) を語り手として、シーモアの精神的残光の中にうごめく兄弟達の物語である。そしてこのバディとシーモアとの間にはかなり共通した面が見られ、更にそれは結局、サリンジャー自身の人間像の投影されたものと考えられるのである。

三

サリンジャーの大抵の作品に共通しているテーマは、非常に感受性の強い人間が、そういう人間から見れば甚だ無神経に、雑駁にできている世の中に生きることのむずかしさ、といったものである。シーモアは戦争に参加して神経衰弱になった。サリンジャー自身も戦争に参加したことは前に述べた通りである。サリンジャーは、無神経な、雑駁な世の中の最たるものとして、戦争とか軍隊を考える。勿論、大量殺人を事とする戦争が無神経で

殺伐でない筈はないが、ここで論じる戦争は、いわゆる人道主義・平和主義の立場から反対される戦争ではない。サリンジャーはユダヤ人の血を引き、ヒットラーにじゅうりんされる直前のオーストリアやポーランドで暮したこともあり、多分第二次大戦には、一種の使命感に燃えて積極的に参加したのである。そういう気持と、それでもやはり戦争や軍隊を厭う気持とは両立するものなのであって、それは人生を愛する気持と厭う気持とが両立し得るのと同じことである。ということは、かかる見方に立つならば、戦争は人生の一部を拡大した、象徴的状况に他ならないのである。『危険な年齢』のホールデンは次のように言う。

兄のB・Dは四年間も軍隊にいたんだ。戦争にも出たのだが——フランス上陸戦なんかにも参加しているんだぜ——戦争よりも軍隊そのものを嫌っていたようだった。僕はその当時まだ子供同然だったけど、兄が休暇などで帰ってくると、ただもうベッドにごろごろしていたことをおぼえている。茶の間にはいつてくることだってほとんどなかったな。その後、海外に出て戦闘に加わったんだが、負傷もなにもしなかったし、ひとを射たなくてもすんだのだ。一日じゅう司令官用自動車を運転して、カウボーイ上りの將軍のおともをしておればそれでよかつたのね。ひとを射たなきやならないことになっても、どっちを向いて射つたらいいかわからなかつたらう、と兄はアライや僕に話したことがあった。軍隊というところはナチ党と交りがないほど悪らつな人間で一杯だったそうだよ。……自分が軍隊にとられて、アックレイやストラドレーターやモリスのような連中の一団としじゅう一緒に行軍したりなんかしなきゃならないことになつたら、気狂いになるにきまつている。僕は一度、一週間はかりボーイスカウトに加わつたことがあるんだが、自分のすぐ前のやつ首筋を見ているだけでさえ我慢がでなかつた。ところが団の奴等は、すぐ前の男の首筋を見ているとばかり言つてやがるんだ。今度また戦争があらつたら、僕みたいな人間はひっぱり出して銃殺にしたほうがよからうと思うよ。

ホールデンは大学予備校で寮生活を送る青年だが、学校の雰囲気常に違和感を抱いている。アックレイもストラドレーターも寮の仲間であるが、彼等の無神経にいつも悩まされている。アックレイは、歯のきたないニキビだらけの男で、やたらに人の部屋に入ってきて、机や戸棚の物をかき廻し、人のすることを一々詮索し、その

ために人の仕事を邪魔しても一向に意に介さない。ストラドレーターは美貌と肉体美の持主だが、本人はそれをかなり意識してやたらに上半身裸体になり、他人のセーターが気に入るとそれを借りることを何とも思わず、自分のデートのために宿題を平気で人に頼み、顔は念入りに剃り上げるが、かつて一度も剃刀の手入れをしたことがない。

これらのことは、「エズメのために」(“For Esmé—with Love and Squalor”)の主人公X軍曹が軍隊で体験することと少しも変わらない。彼が軍務の余暇に自分の部屋で読書をしていると、戦友のZ伍長がドアを乱暴に開けて入ってくる。彼はジープの運転手であるが、戦がすんでもジープの風除けを前に倒した戦闘体制で颯爽と飛ばすのを好む。写真うつりのする好男子で、報道写真のモデルに頼まれれば、内心得意でポーズをとる。こういった人間がいかなる精神の持主を象徴しているか言うまでもない。この男が主人公の部屋に入ってきて、ベッドの上に靴ごとのつておしゃべりを始める。彼にとっては、そうしたやり方が、男同士の世界では自然で打ちとけたやり方だと思っている。だからX軍曹が足をおろしてくれと言うといささかむっとして、俺の足をどこへ置こうと勝手だろ、という態度を示す。Z伍長は、面白い話を聞かせて友達にサービスしているつもりなのだが、主人公にとってはそのことがたまらない。それで一々相手の言うことを茶化すようにして無言の抗議をするのだが、勿論Z伍長には通じない。Z伍長からみれば、X軍曹のような人間は、まことに偏屈なつき合にくい存在である。しまいには腹を立てて、

「お前はいつまでまじめになれないんだ。」
と言う。

このような経験は、ホールデンやX軍曹のような性格の者には、学校の寄宿舎であれ、軍隊であれ、いかなる

社会にあってもあり得ることなのだ。ただ、学校での仲間は少なくともインテリであり、軍隊では全く異質の仲間と接する可能性はある。しかし、インテリとそうでない者との間にどれだけの差異があるというのか。本質的に違いなどありはしないのだ。

集団がかかる人間の集まりである限りは、どここの軍隊もナチの軍隊と変わるところがなく、学校の寄宿舎と兵営とも変わるところがない。X軍曹は生まれながらにして、かかる環境に順応してゆくことのできない人間なのだ(X軍曹はシーモアではないがよく似ている)。彼が戦争を嫌悪するのは当然だが、彼が恐れるのは、わが身をほろぼす敵弾よりも、戦争で異常になった人間達である。彼はドイツ軍の集中砲火を浴びて凹地に伏していた時、Z伍長がジープにはい上った猫を射殺したことに激しい嫌悪の情を抱いている。サリンジャー自身、従軍中のヘミングウェイが、ドイツ製のルガー拳銃の威力を試すためにニワトリの頭をぶっ飛ばしたのを見て、以来大のヘミングウェイ嫌いになったという。人間を殺すのも、猫を殺すのも、同じ悪である、というのは、豚を殺すのも白鳥を殺すのも同じという理屈と同じである。戦争は人を殺すためのものであって、猫やニワトリを殺すためのものではない。勿論人を殺していい筈はないが、X軍曹、ないしシーモア、ないしサリンジャーは、ナチスと戦うために志願したのである。

戦争や軍隊のもう一つの悪は、自分のしたくないことを、したくもない時にしなくてはならないということだ。軍隊のさまざまな規律もそれに含まれるだろう。それらに一々従っていくことはやりきれないことだ。しかし、問題はそこにあるのではない。そんなことはむしろ枝葉末節のことなのだ。問題は、生死という、全く個人の問題にまでそれが立入ることである。毒ガスが流れてきたら、ガスマスクをつけなければならぬ。それは命令によって強制される。しかし毒ガスを吸いこまないうちに、マスクを、凹凸の多い顔面に、すきまなくすばやく装

着するなどということは、不器用な者にとっては負担なことだ。まごまごして死んだら、それは罪になるのであるうか。個人の死ぐらひは、個人の選択にまかせておいてもらいたい。X軍曹が輸送船の舷窓からこっそりガスマスク箱の中味を海に投げ棄てたのは、かかる考え方を示すものであるう。雷に打たれるかどうかは天において定められたことなのだ、と考えているX軍曹は、戦場における死についても、そのように考えている。しかし、それはいわゆる戦死とはいささか違うようだ。軍隊は兵士の恣意的な死は許さない。それは味方の戦力を減らす利敵行爲となるからである。

四

だがX軍曹やホールデンが、世の俗物どもに侮蔑のまなことを注ぎ、自分達がそういう連中にいためつけられていると思ひこんでいる間は、彼等自身もまた、そのあまりにも一方的な自己中心主義によって他を傷つけているということに思ひ至らない。「お前はいつまでまじめになれないんだ」というZ伍長の言葉は、市民的倫理の上立った、世のすね者への批判である。X軍曹は自分が捕えたナチの女黨員の持物であったゲッベルス宣伝相の著書『比類なき時代』(Die Zeit ohne Beispiel)をあけてみる(サリンジャー自身諜報機関に属し、民間人や捕虜を訊問してゲシュタポの捜査に当たったという)。その見返しには、くだんの女黨員の「救い難い程の几張面な筆蹟」で「神よ、人生は地獄です」と書き込まれてある。

彼女は正直な人間なのだろう。事態を正しく認識しているようだ。しかし、普通ならば、人をして狂気に追いやり兼ねないその認識を、彼女の筆蹟が示すように、まさに冷静に、正確無比になしとげたということは、恐る

べきことと言わなくてはならない。それは丁度、ドイツ民族の卓越した頭脳が人間屠殺のさまざまな精妙な手段の発明に向けられたことと、軌を一にする。X軍曹はその下に「神父たちよ、教師たちよ、余は『地獄とはなんぞや』と考えるとき、それは愛することのできない苦しみと解釈する」という『カラマゾフ兄弟』におけるゾシマ神父の言葉を書き加える。

これは、かの女黨員に対する告発とも考えられるが、実は、愛することのできない苦しみに陥っているのは、他ならぬX軍曹なのではないか。

この苦しみを現代の世界における顕著な病状と感じる人は少なくないであろう。それはナチズムの抬頭と戦争による人心の荒廢が大きな原因であることは否めないが、実際は、かかる地獄は戦時・平時にかかわらず存在するのだ。ホールデンの地獄は戦争の所産ではない。X軍曹がノルマンジーに出撃する前にイギリスで出会う女性エズメも、この地獄に苦しむ一人である。彼女は父が戦死した戦争犠牲者であるが、そもそも彼女の貴族という生まれが、父の戦死とはかかわりなく、彼女から愛する能力を奪ったか、少なくとも、眠らせておいたのである。貴族は丁度金持が天国に入ることがラクダが針の穴を通り抜ける程困難なように、愛することのできない人達なのだ(『戦争と平和』におけるニコライ老公爵を見よ。貴族の姿を描いてこれに勝るものはない)。彼女がX軍曹に近づく時の態度は、尊大で、まことにぎごちない。その弟も、人に対する態度を知らない哀れな動物的境地をさまよっている。彼は、他人に示す表情としては、舌を突き出したり、下手な野球の審判に浴びせるにふさわしい奇声を発する(アメリカ兵の悪い感化であるが)ことしか知らない。彼の心を支えるものは、ただ傷つき易い自尊心ばかりである。

だがエズメは、そうした自分の世界を地獄と感じる能力を具えた少女である。X軍曹が作家志望であることを

知って彼女は言う。

「みにくさ (squalor) について書いてちょうだい。わたくし、みにくさにとっても興味を持っていますの。」

彼女の言い方は興味がある。彼女は「みにくいこと」とか「みにくい話」とは言わない。またX軍曹に

「あなたはみにくさをご存知？」

とも言う。あたかも「みにくさ」という概念的なことが、彼女の心の中では、明らかなイメージを持った存在でもあるかのようなのである。彼女にとっては、「みにくさ」とは人生の根源に横たわる厳然とした事実なのであって、それは彼女の厳しい内省的生活もたらした世界認識であるに違いない。

だが、エズメのような貴族でなくても、ナチスの党員でなくても、「みにくさ」を感じることはできるものなのだ。ホールデンのように、たまたま学生であっても、作家であっても、教師であっても、「みにくさ」を感じることが出来る。なぜなら、それは人生の根源にあるもの、いや、人生そのものなのだから。ヨハネ伝の表現をまねれば、

はじめにみにくさありき
である。

五

「エズメのために」は、愛なき世界に呻吟するX軍曹が、エズメの愛によって救われるという筋であるが、そのきっかけはX軍曹のもとに届くエズメから送られた小包である。戦場を転々とした彼を追いかけたその郵便物

は、何回となく転送されたあげくに、すっかり傷んでいる。X軍曹がそれをあげると、中から彼女が父の遺品として大切にしていた大形の懐中時計がでてくる。自分が持つより彼が持っていた方が役に立つだろうという彼女の思いやりなのだ。しかし時計のガラスは無残にも壊れてしまつて、最早用をなさい。それは愛が空しく破壊されたことを意味するのか？ そうではあるまい。それどころか、愛の真の姿を語るものではないか。なぜなら、愛する者の身は傷つくものなのだから。貴族の生れで、かつて自分の身が傷つくことを経験せず、意識的・無意識的にそれを避けてきた彼女が、今や愛の傷をからだ中に受けているのである。そして手紙の終りには、字を習いはじめたという弟の筆蹟がある。

Hello Hello Hello Hello Hello

この稚拙な単語の羅列に、少年の生々とした感情があふれるばかりに示されている。かつては、人に謎をかけて返答に窮せしめ、自分で答を与えることに無上の快感を感じ、そのために同じ謎を二回かけて相手に答を出されて憤激した、スフィンクスのように残忍なこの少年が、始めて自己の真情を素直に表現する術を体得したのである。ここにおいてX軍曹の心は安らぎ、久方振りに眠気を覚える。眠りは、後でも述べるが、サリンジャーにおいては一つの救いの境地なのである。

人間の苦しみが愛によって救われるというのは万古不易の真理であるから、このテーマは特に新しいものではない。だが愛——恋愛——の多くは激情的で、人間はひとときの激情を持続させることはできないから、こうした愛はうつろい易い。男女の主人公の愛が実つてめでたく終る映画などを見ていると、彼等はこれからどうやって生きてゆくのであろうか、という不安に駆られることがある。愛をそのような愛に限定する限り、人間は苦しみから解放されない。愛を永続的ならしめるには、別の愛の倫理が必要である。当然、それは宗教的な方向に

向うであろう。

だが、そのことは、いわゆる恋愛を否定するものではない。恋愛は、より高い愛への一段階と言うべきであろう。エズメの愛は恋愛の可能性を大いにはらんでいる。しかし彼女はX軍曹には妻があることを知っており、後に他の男と結婚して式の招待状を彼に送る。彼女の心には、少なくともこの段階では、X軍曹を独占しようという気持はないと考えることができる。いわゆる恋愛には愛する者を独占し、他から遠ざけようとする意図が働く。しかしエズメは、ひたすら愛する者の身を案じ、その才能が戦争によって害なわれないことだけを願うのである。

X軍曹(この時は戦争は終つてもはや軍曹ではない)はこの招待状を受け取って、費用もいとわず飛行機で行こうと考える。しかし常識的(levelheaded)な彼の妻からすれば、よその女の結婚式のために大西洋を飛行機で飛んで行くなどということは、少々行き過ぎに思える。また、他の男が、自分の妻となるべき人のためにそのように熱心になつては、花婿が不安に思うというものである。そうしたおもんばかりから、彼はエズメの結婚式に出席することを断念するのだが、これは恋愛を超越した愛が容易に世間から理解されないことを意味するもののように思われる。もっとも彼に全然邪心(恋愛を邪心ときめつけることはできないが、彼には妻があるのだからやはり邪心だ。しかし、本当は私心と言つた方が正しいかも知れない)がなかったとは言ひ切れないのであるが――

六

次に『フランニーとズーイー』(Franny and Zooey)に話を移す。グラス家の末娘フランニーは女子大の学生で、演劇をやっている。彼女はアイビー・リーグのある名門校の学生レイン・カウテルと熱烈な恋愛関係にある。二

人は、ある週末、フットボールの試合見物かたがたデートを楽しもうということになる。その直前に彼女はレーンのところへ恋文を送る。その手紙によれば、二人は既に肉体関係も結んだらしい。彼女の手紙は甚だ熱烈で、
「I love you I love you I love you. というような文句もある。しかし、よく読むと、自分の情熱がことによる」と相手の頭上をいたずらに通り越していくのではないか、という焦りに似た気持も察せられる。

フラニーは、恐らく二人の情熱が最高調にあつたろうと思われる時に、果してこの愛が本物なのか、それがいつまで続くのであろうか、という疑惑の影が心の中を通り過ぎるのを経験したらしい。例えば、かつてのデートで芝居を見た帰りのことである。折から雨が降り出して劇場の前はタクシーを拾おうとする客でごった返していた。レーンがやっと一台のタクシーをつかまえたと思つたら、横からサッと別の客に車を奪われてしまう。レーンは車を横取りにされた自分の気弱さに対する屈辱感が、そうまでして女のために尽さなければならぬ男性としての忿懣となつて、怒りにゆがんだ敵意ある顔付で、フラニーに車が拾えないことを報告する。その時フラニーがふと彼に対して抱いた軽蔑感が、一種の罪の意識のように彼女の心の底にひっかかっている。恋は盲目ということが真実であるのなら、彼女は盲目であるべき時に既に彼女の心の底にひっかかっているのである。

彼女には愛する資格がないのか？ それともこの愛がそもそも本物ではないのか？ しかし、前にも述べたように、人間の激情は永続せず、かかる愛はうつろい易いのである。

フラニーのこの日のデートは、彼女にとって、二人の愛の实在を確かめる機会でもあった。だが、のっけから、彼女は「手紙を受取って？」という質問に対し「どの手紙？」とどげられて不吉な予感を感じる。

ここでレーンの人柄について述べると、彼は英文学を専攻する学生である。名門校に籍を置くからには秀才であるに違いないが、更に彼は、その名門校の他の学生達よりも自分を優れた者と思つている。だが彼にはインテ

りにつきものの一種の気弱さがある。人と争ってまでタクシーに乗りうとすることができないのもそのためだ。だが彼のプライドは自分の弱さを他人に見せることを許さない。特にガール・フレンドに対しては。彼はフラニーが姿を見せる直前まで、彼女のあの手紙を——既に何回も読み返した手紙を——読んでいたくせに、そう言うて彼女に自分の弱みを示すことに堪えられない人間なのだ。

やがて二人は、町のレストランのテーブルに向い合って話を始める。ここでまた彼女は、レーンが椅子に腰掛けてあたりを見廻したその一瞬の動作に、自分の連れている女の子が非常な美人で、しかもそこいらの平凡な娘とは違うのだということを意識した満足感を見てとる。そのこと自体は、女の身にとって悪い気持のものである筈はない。だが、それが結局はフラニーに対する愛のためではなくて、彼自身に対する愛のためであることをフラニーは知るのであり、それを知ったことにまた、彼女は一種の罪悪感を感じるのである。

レーンは最近書いたフローベルに関するレポートをめぐって、自己のフローベル観を語る。それは秀才らしい、熱っぽい、有無を言わせぬ、一方的な会話である。ひいてはフローベルに関する多くの研究が下らないものだということになり、彼のレポートに大きなAをくれた教師まで大した奴じゃないような話し振りだ。

フラニーは、そうしたレーンの態度が、自分の学校で教授の代講をつとめる若手の助手や博士課程の学生が、気負った調子で古今の大家達を手玉にとってみせるやり方と比較して、興ざめた気持になるのをおさえることができない。大学にいる連中はどれもこれも、多かれ少なかれ、才気走ったあの若い学者達のような、うぬぼれの強い自我の固まりである。そして、ああレーンも！

「わたし、学者先生やうぬぼれの強いチンピラ批評家たちにはもううんざりして大きな声でどなりたくらいだわ。」

と彼女は言う。

このように彼女の気持をとげとげしいものにしてゐるのには、最近彼女が自分が関係する演劇活動に非常な不満を抱いていることも原因している。華やかな演劇活動の陰では、配役をめぐる仲間同士の争い、嫉視・反目が始終どす黒い渦を巻いているのだ。また観客は観客で無理解な連中ばかりで、そういうことが彼女には最近とみに堪えきれなくなってきたのである。どこへ行っても、お互にエゴをむき出しにして、角突き合い、傷つけ合うばかりではないか。そして今や恋人のレーンさえも、エゴのかたまりに見えてくる。それが、フラニーには悲しいのである。

フラニーにもわかっていることだが、他人のエゴを意識させるものは、他ならぬ自分自身のエゴである。人は己れ一人超越した所にあると思つても、果してそれがどれだけの高みにあるとのか。俗物性を排撃すれば、そこに生じるのは反俗物主義という名の別の俗物根性なのではないか。この関係は先のX軍曹とZ伍長の場合と同じだ。レーンの会話が自己中心的なものである一方では、フラニーの方でも、自分の問題にかかずらつて相手の話を少しも聞いてやろうとしない。そういうフラニーに対してレーンが、

「君は今日はばかに不機嫌じゃないか。」

と言つた言葉は、丁度Z伍長がX軍曹を批難する調子を思い起こさせる。

かくて、週末のデートは台無しになり、フラニーは激しい自己嫌悪に襲われて卒倒する。

七

フラニーのかかる境地を離脱すべく、彼女がとった手段は、日本人のわれわれからするといささか奇異に感じられるが、念仏を唱えることである。いや、正確に言えば、キリスト教の祈りの言葉を、念仏流に常住坐臥唱えることである。さていよいよこれからサリンジャーの禪が直接登場することになるが、グラス家の長男シーモアは、次弟バディと組んで、弟妹達の精神訓育に当る。シーモアは先に述べたように宗教的な人物で、特に仏教に傾倒している。彼は鈴木大拙博士が「純粹な知覚——つまり悟り——の状態にあることは『光あれ』と神が言った時よりも前の神とともにあることだ」と述べているのを読み、弟妹達には、まずこの光をできるだけ示さないでおくことを教育の根本方針とする。つまり、禪で言う「無知識」の探求で始めようというのだ。具体的には、学校の通常のカリキュラムを排し、坐禅を組み、念仏を唱え、教材には専らイエスやゴータマや老子などの聖人の言行録を用いるのである。このような教育がどのような効果をあげるものか、勿論これは作り話だから、考えたとこで始まらないし、また、その事実を指摘するだけでは、サリンジャーと禪について論じたことにはならぬ。ここで問題になるのは、特にフラニーの問題解決への道であり、それがいかに禪の道に通じるものかということである。

フラニーが念仏流の祈りを唱えることを思いついたのは、言うまでもなく、兄達の教育の影響である。しかし、この試みによっては、彼女はまだ悩みから解放されない。彼女を救うのは、すぐ上の兄ズリーイである。そしてそのズリーイにその知恵を授けたのはバディである。

レーンとのデート以来すっかり精神的に打ちのめされ、病人のようになったフラニーの身を案じて、母親がズリーイにあの子を慰めてやってくれと頼む。これが「ズリーイ」の前半の場面である。その一寸前に、ズリーイは大分前に来たバディの手紙を読んでいる。それは、バディ達による教育に関する弟への弁明の言葉を綴ったも

のである。

その中でバディは、その手紙を書く動機となった二つの経験を紹介する。

一つは、彼が近所のスーパーマーケットで買物をしていた時のこと。肉の売り台の前で小さな女の子が母親の買物の済むのを待っている。四つ位のきれいな子で、バディの顔を目をまるくして見あげている。思わずバディは、君はきれいな子だね、と話しかける。彼女はこっくりをする。きっと君にはボーイ・フレンドが沢山いるんだろうな。またこっくり。何人いるね。彼女は指を二本立てる。

「ふたりも！ それはまた沢山なボーイ・フレンドだ。その子の名前は何ていうんだね、お嬢ちゃん？」

「ボーイとドロシー」

これを聞いて、バディは肉の包みをつかんで駆けだす。

ボーイとドロシー。彼女のボーイ・フレンドは女の子である。しかし、彼女は自分の大好きな子に、男女の區別をしていないのである。これをもって同性愛を連想する者に呪あれ！ 愛する者に男も女もありはしないのだ。もし大人にして、かかる愛の境地に達することができたら、それは何とすばらしいことであろうか。

もう一つの経験は、自殺したシーモアの書き残した詩を発見したことである。それは俳句で、日本語で書かれたということになっているが、その日本語は存在しないから、意味だけを伝えようと、

飛行機の中の女の子

自分の人形の頭をねじむけた

ぼくを見ようとして

というのである。これは女の子が人形の頭をねじむけて一緒に作者の方を見たとも、人形だけに見せたとも、両

方に解釈できるが、要するに、その女の子にとって、大事な人形は自分のからだの一部なのだ。

このような俳句は日本にもある。かの芭蕉の有名な句、

閑けさや岩にしみいる蟬の声

もその一つ。まず、普通の見方として、蟬の声があたりの静けさを深めるはたらきをしているという解釈ができる。しかし、このような解釈では、芭蕉の経験から程遠い、とブライズ氏は言う。静けさは、蟬の声があつてこそ生じる、いや、蟬の声が静けさそのものなのだ。

バディは、この二つの経験を、自分達がやった教育を正当化する証しとして受け取ったのである。シーモアがある時バディに、「あらゆる正統的な宗教的研鑽というものは、男の子と女の子との、動物と石との、昼と夜との、暑さと寒さとの差異を——迷誤にもとづく差異を——忘れ捨てる (unlearn) ことに到達するにちがいない」と語ったことがある。その言葉の真の意味を、バディはこの二つの経験によつてはつきり悟るのである。

ズーイーは兄のこの心を体し、フラニーに語りかける。ズーイーもフラニーと同じく演劇にたずさわる身であり、観客の低級さを嘆くフラニーの気持はよく理解できるのである。だが彼は、「芸術家のただ一つの関心は、何らかの完成をめざすことで、しかもそれは自分自身の立場からの完成であつて、他人の立場からのものではない」言いかえればそれは「神のためにやる」ことなのだ、と言つて、フラニーにただ舞台に立つことだけが以前の勤めだ、と論ず。そしてかつて自分が経験した話を聞かせる。

それはズーイーが幼い頃、例のラジオのクイズ番組のレギュラーとして出場していた時のことである(グラス家の兄弟は皆次々にこの番組に出演する)。彼はシーモアから、放送局に行く前には靴を磨け、と言われる。ズーイーはその頃幼いながらもスタジオの観客のくだらなき、アナウンサーのくだらなきにうんざりしていて、そ

んな連中のために靴を磨くのはいやだ、とごねる。どうせ見えやしないじゃないか。するとシーモアは、「あの肥った婦人」のために磨いて行くのだ、と言う。ズーイーには、その時はそれがどの婦人のことを言ったのかわからない。しかしシーモアは非常にまじめな顔をしているので、言われた通りにするのである。

それ以来、ズーイーは「あの肥った婦人」のために、必ず靴を磨くようになるが、一体その人が誰のことなのか、シーモアは一度も教えてくれない。しかし、ズーイーには次第に彼女のイメージができ上ってくる。それは、どこかの家の玄関先に坐って、一日中ハエを追いながらラジオを大きな音でかけっぱなしにしている、癌でも病んでいるような女の姿である。

フラニーはこれを聞いてハッと思い当る。彼女も、かつてシーモアから、同じようなことを言われたことがあり、何となくズーイーが想像するところの「肥った婦人」とほぼ同じイメージを、心に描いていたのである。彼女は何かを期待するように、ズーイーの話に耳を傾ける。

俳優がどんな場所で演技しようと、ぼくは気にかけない。夏の公演だって、ラジオの放送だって、テレビだって、あの着飾った、ブクブク肥った、陽に焼けた顔をした連中の集まるブロードウェイの小屋だっつかまやしない。だが一つ、大変な秘密を話してやろう……シーモアの「肥った婦人」でない人間なんていやしいのだ。お前の嫌いな学校の教師だって、そのいとこだって、あの「肥った婦人」でない人間なんてどこにもいやしいのだ……お前にはわかるか、あの「肥った婦人」が誰だか。いいか、あれはキリスト自身なのだ。キリスト自身なのだよ、お前。

これを聞いた瞬間、フラニーの心の中には清らかな啓示の光が輝きわたり、彼女の心の悩みは嘘のように消え去る。彼女は、ただ無言のまま、静かに身辺をかたづけ、ベットに入って、久しぶりの安眠を貪るのである。

(1) R・H・ブライズ『禪と英文学』三三九頁。

グラス家の家庭小説はまだ未完成である。従ってフラニーのその後については、まだサリンジャーの口から語られていない。しかし、恐らく彼女は演劇に復帰するであろう。レインとの関係は？ 過去の一時のような愛は、もうよみがえらないかも知れない。しかし彼女の愛には新しい境地がひらける可能性がある。

シーモアの言う「肥った婦人」とは、恐らく、名もなき民衆を象徴しているであろう。ラジオの番組を選択することも知らず、やたらに音を大きくして、一日中かけっぱなしにして聞いている愚かな民衆を。しかし、他に何一つ楽しみを持たぬ心貧しき人々を、その愚かさ故にどうしてあざ笑うことができよう。むしろそうした人々のためにこそ、放送の内容は高められなければならないのだ。出演者は真剣にやらなくてはならないのだ。ホールデン・コールフィールドは寄席で、くだらない芸人や客の中にあつて終始真剣に一楽士に心打たれる。彼は演奏中にたった二回ドラムを叩くだけなのだが、何もしていない時でも、決して退屈そうな顔をしていない。そしてドラムを叩く時になると、顔に神経質な表情を浮べて、いかにも感じのいい美しい叩き方をするのである。

ここにズーイーの言う「神のためにやる」尊い人間の姿がある。それは
わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ちわれになしたるなり

という聖書の言葉を、そのまま実践した真のクリスチャンと言えるが、ブライズ氏はこれを禅の境地とも言うのである。むしろ禅の方に近いと言った方がいい。なぜなら、禅者は「神のために」というような目的意識すら脱却しているからであり、かの楽士も、君は何のためにそんなに一生懸命にやるんだ、と聞かれたら、きよとん

とした顔をして、返事につまってしまうに違いない。人間、勞せずしてかかる境地に達することができたら、それに越したことはない。しかし、自意識に勝った現代の知識人が、無意識のうちにかかる生き方を選ぶことは、殆ど不可能である。サリンジャーの主人公が苦悩の末に體驗的に悟りをひらく一方で、生まれながらにして悟りの道歩んでいる人間を、名もなき民衆の一人として脇役に登場させ、主人公達がそうした人々から人間の生き方を学ぶのは、もっともなことと言わなければならない。

しがな職業に従事し、貧しい日々を送りながら、充足した人生を送る人は、少なくない。私達ですら、時にはそのような三昧の境地にひたることもあり得る。その時私達の前には、社会の矛盾も人間の悪もない。これを進歩を忘れた退嬰的な思想とみるのは誤りである。この間の心の消息を、もう一度、サリンジャーの小説においてふりかえてみよう。

ドーミエスミス〔ドーミエスミスの青の時代〕(De Daumier-Smith's Blue Period)は、自分の仕事に対する嫌悪感から、この世界を仕事場の階下にある医療器具店のショー・ウィンドーのような、ホロー引きの鉄でできた冷たいシビンや便器や手術台や、脱腸帯をつけた木偶人形の並んだ世界に見立てている。だがある時は、その店の若い女が人形の脱腸帯を新しいのと取り代えているところへ来合わせる。彼はガラス窓の外からそれを眺めている。不意に女は顔を上げて彼の姿に気がつく。彼は、会釈をするつもりで彼女にほほえみかける。だが彼女の方は、不意に人の姿に気づいたのと、その人影の顔の表情が動いたのにびっくりした拍子に、尻もちをついてしまう。彼女は脱腸帯を代えているようなところを若い男に見られ、しかもその目の前で尻もちをついたことで、すっかり気が動転してしまうが、一瞬顔を赤らめただけで、すぐ仕事の続きをやり終えて店の奥にひっこんでしまう。

この時、ドミエリスミスの心に啓示がひらめく。この醜悪な仕事を、無心に（少なくとも尻もちをつくまでは）最後までやり遂げるこの女性から、彼は人生の生き方を学んだのである。この世がいかにみにくく、自分の仕事がいかに堪え難くとも、それに全力を傾注することこそ救いの途はある。そうすれば、このショー・ウィンドーによって象徴される醜悪な世界も、花園と眺められるようになるだろう。たとい、その花が、ホーロー引きの鉄の花弁でできていようとも。

(2) 『禪と英文学』の六一七頁に同じような話が紹介されている。

この論文におけるサリンジャー自身に関する記事は Warren French, *J. D. Salinger* (New York, 1963) を参考にした。また作品の邦訳があるものはそれも参考にした。それらは次の通りである。

『危険な年齢』橋本福夫訳 グヴィット社

『エズメのために——愛とみじめさをこめて』山田良成訳 「三田文学」第四九卷七号

『ズーイー』山田良成訳 「アメリカ文学」第一号